

Title	モラウとイタダクの用法差 : 国会会議録を資料として
Author(s)	岩井, 智哉
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2015, 49, p. 95-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61336
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モラウとイタダクの用法差

—国会会議録を資料として—

岩井 智哉

キーワード：授受動詞／敬語／モラウ／イタダク／国会会議録

1. はじめに

授受動詞モラウにはその謙讓語としてイタダクがあり、それぞれについて本動詞の用法と補助動詞の用法がある。

- (1) 花子が先生に数学の教科書をもらう/いただく。
- (2) 花子が先生に数学を教えてもらう/いただく。
- (3) 花子が先生に数学をご教授いただく。

例文(1)は本動詞、(2)と(3)は補助動詞の用法である。しかし、例えば

- (4) 花子が先生に数学をご教授をいただく。

のように、形の上ではヲ格をとって本動詞のように見えても、意味は例文(2)(3)とほとんど変わらない用法も見聞きする。ここから、○○ヲイタダク という形には「本を頂く」のように名詞をヲ格にとり具体的なものの授受を表す本動詞の用法のほかに、「ご教授」「お叱り」などをヲ格にとり、具体的な物の授受ではなく行為の恩恵性を表す補助動詞的な用法があるように思われる。

後者の用法では「厳しいお叱りを頂く」のようなヲ格の動詞連用形や動名詞（ここでは、影山(1993)に倣い、スルを下接してサ変動詞になりうるものを「動名詞」と呼ぶ）が連体修飾を受けるものと、「厳しくお叱りを頂く」のような連用修飾を受けるものがある。この時の「お叱り」は形としては格助詞ヲが後接し、一見名詞のように見えるが、連用修飾を受けているとなると動詞としての性質を強く保ち、○○ヲイタダクの用法としてはより補助動詞用法に近いのではないかと考えられる。

本研究では、国会会議録による観察を通してモラウとイタダクの補助動詞的な用法のバリエーションを比較し、待遇差だけに留まらない違いがあることを示す。本稿では、モラウ、イタダクの直前にヲ格が来る形を全て含めたものを○○ヲモラウ、○○ヲイタダクとし、補助動詞的な用法をオ・ゴの有無で区別する場合は～ヲモラウ、～ヲイタダク、オ・ゴ～ヲイタダクとする。

2. 先行研究

イタダクなどの授受動詞の補助動詞としての意味・用法については由井(1993)、菊地(1997)、高見・加藤(2003)、山田(2004)などかなり充実した考察がある。オ・ゴ～イタダクの形については菊地(1997)が「お書きになっていただく」「ご指導なさって(になって)いただく」の「になって」「なさって」の部分を端折ったものだと見ると分かりやすいとしている。

国立国語研究所・宮島(1978)では、「所有権の移動」に注目し、原則的には所有権が移動していることをあらわすとしたうえで、モラウとイタダクの例外的な用法にも言及している。モラウは所有権の移動をあらわしその例外は少ないとしているが、次のような例外も挙げている。

(5)「ちゃあ飲むよ。一此奴へ貰ほう。」(『末枯』)

(6)「ちょっと本を貰いに来ました」と声をかけて、「塚原朴伝は戸棚ですか」と言った。(『暗夜行路』)

(7) 其の勸次は二人を連れて近所へ風呂を貰ひに行つた。(『土』)

(5)はすぐに飲んでしまうもので所有権はそれほど問題にならず、(6)は一時的な借用、(7)は慣用的な表現としている。

イタダクについては、「『もらう』よりもやや例外的なばあい、すなわち所有権の移動をとまわらない例がある。」として次のような例を挙げている。

(8) 昼近くに、蕎麦屋の出前持ちが来た。「道具をいたゞいて参ります。」(『波』)

(9) 「赤ちゃん、いたゞきませう。」(『波』)

(10) 「まあ、私がお部屋を戴きますのでございますか。」(『桑の実』)

(8)は本来の持ち主に帰ってゆき、所有権の移動が起こらない例、(9)は赤ん坊を預かること、(10)は借りることをあらわす例である。これらを記述したうえで、「『もらう』『いただく』の意味も全体として所有権という観点を薄くし、抽象化する方向に向かうか、あるいは、本来の意味から分かれた第2の意味を生じるか、両方の可能性があると思われる。」と予測をしている。

「ご教授をいただく」などの、イタダクの前にヲが入っているのに補助動詞のように用いられているものについて本格的に研究したものはあまり見られないが、菊池(1997)と野口(2009)に言及がある。

菊池(1997)では、先述のようにオ・ゴ～イタダク、オ・ゴ～クダサルがあつかわれ、オ・ゴ～ライタダク、オ・ゴ～ラクダサルについては国会の質問や答弁で頻繁に聞くが、「いささか耳障りである」としている(菊池1997:210)。野口(2009)は、「映画を見た」などのヲがくだけた言い方では省略されるのが、改まった言い方では省略されないことから、政治家などが敬語で話すときはヲを入れるものと思ひ過剰にヲを入れているのではないかと推測している。

3. 国会会議録について

菊池(1997)と野口(2009)の指摘する通り、補助動詞的な○○ヲイタダクの用法は政治家の発話でよく耳にするとと思われる。国会における議員らの発言は国会会議録として記録され、インターネット上で公開されている。本研究ではこの国会会議録を利用してモラウとイタダクの使用実態を調査してみたい。

国会会議録を資料として使用することについては松田謙次郎(2008)で詳しい解説・考察が行われている。

松田(2008)によると国会会議録はそもそも言語研究を目的としたものではないため、発言がそのまま記録されているわけではない。不規則発言や秘密会記録などの記録が非公開または削除されたり、読みやすくするための整文が行われていたりする。

非公開や削除については松田(2008)は「このこと自体はコーパスとしての利用価値を大きく損なうものではない」としている。

整文は議員らの言い誤りや口語的すぎる表現を修正し読みやすくするための字句整理作業である。青山(1989)には1972年に参議院記録部に設置された整文委員会で検討の結果設けられた以下の基準が紹介されており、松田(2008)にも引用されている。

1. 言い誤り、脱落、不整などのため発言の趣旨を明確に文字に表現しがたいと判断される場合は、軽微なものに限り、社会通念上認められる表記の方法に従って当該部分の整理を行う。
2. 字句の整理は、一歩誤ると改竄につながることを常に念頭に置き、必要最小限度において行い、軽微かどうか判断しがたい場合は発言者等に確認したうえで行う。
3. 発言そのものが問題となる恐れがあると判断される場合は、字句の整

理を行わない。

4. 会議録主任が発言の訂正の請求を受けた場合は、その訂正が軽微なものであるときは会議録主任において処理し、訂正の内容が問題になる恐れがあると認められるときは、必要に応じ委員長の許可を求めるものとする。

青山(1989)は、フィラーなどの「けば」の除去や誤順の整理、内容語の言い誤りの整理について述べているが、機能語や補助動詞について、また方言や俗語的言い回しについてどのように扱っているかは述べていない。

松田(2008)は、整文が行われているという点で国会会議録は自然談話そのものではなく、慎重に取り扱わなければならないとしている。

しかし整文によって手が加えられているということは、ポジティブに捉えればある程度許容され、通じている表現が残るとも考えられる。あくまで口語そのものというのではなく「国会会議録の日本語」として考えれば、人の発話そのものでは一時的な言い誤りとの区別が難しい口語の新用法の用例を集めるのにはむしろ適した資料と考えることもできる。

用例採取の資料として国会会議録検索システムを使用する利点をまとめると、まとまった量があること、口語を基にした資料であること、偶然そこで出ただけの言い間違いなどは整文によって排除されていると考えられること、検索が容易であることである。

4. 調査概要

本調査では国会会議録の衆議院本会議の第1回(1947年)から第179回(2011年)までの全文を国会会議録検索システムからダウンロードしたものを使用した。

HTMLファイルとしてダウンロードしたものをテキストデータにし、更に『えだまめ』(国立国語研究所で開発されたテキストファイルなどをXML

ファイルに変換するソフトウェア)を用いてXMLファイルに変換したものを『ひまわり』(同じく国立国語研究所で開発された、XML文書から文字列を検索しKWICを作成するソフトウェア)で検索する。

モラウの用例数は全部で3805例、イタダクの用例数は271998例であった。

この調査ではモラウとイタダクの用法を分類し、モラウ・イタダクがどのような要素と結びついているか観察することで、イタダクに抽象的な用法が多くなり、通時的にイタダクの様々な用法の使用が増加していることを示す。

5. モラウ・イタダクの用法の分類

資料に見られたモラウとイタダクの名な用法を形の名から次のように分類する。

5. 1 モラウ

モラウには本動詞の用法と補助動詞の用法としてのテモラウに加え、その中間的なものとして～ヲモラウの形がある。実際にはこれらははっきりと完全に区別できるわけではなく、本動詞モラウと～ヲモラウの間に中間的な例もみられる。それらの具体的な分類の仕方は以下に示す。

A) 本動詞モラウ

ヲ格が動詞の用法のない名詞であったり、文脈上モノであることが明らかなもの。また、モラウにヲ格や動名詞、動詞連用形が前接していないもの。

(11) 高知県や岐阜市などでは、フレキシブル支援センターという、給与をもらいながら研修を行う雇用つき研修体系を実施しています。(174 - 衆 - 本会議 - 6号 平成22年02月02日 井上義久)

連用形から転成したもので、ヲ格成分が「小遣い」「お墨付き」など動

詞としての用法が無いものもここに入れた。

(12) 金融監督庁が不良債権の分類基準を恣意的に操作すれば、不良債権の金額は幾らでも変えることができます。同様に、破綻の認定基準を恣意的に操作することにより、実質的に破綻しているはずの銀行も健全であるというお墨つきをもらえることになります。(143 - 衆 - 本会議 - 6号 平成10年08月25日 畑英次郎)

B) ～ヲモラウ

動名詞に直接ヲモラウと続いているもの。ヲ格を影山(1993)のいう結果名詞と解釈して本動詞用法と捉えられるものも多いが、後に述べる～ヲイタダクと比較をするため、サ変動詞化できシテモラウの形にできるものは本動詞と分けてここに入れた。

(13) 同時に、政府関係組織以外からも専門的な知見を持った方に必要に応じアドバイスをもらうことも、官民の英知の結集という視点からは有意義なことであると考えております。(177 - 衆 - 本会議 - 21号 平成23年05月19日 菅直人)

(14) その後のフローを描いてみると、地方自治体などは、時の政権与党の議員と一緒に、内閣府に陳情と称して地域再生計画認定申請の許可を懇願し、補助金の承認をもらい、また、税制上の特例の申請をやはり与党税制調査会に働きかけるという現在の動きと何ら変わりはありません。(162 - 衆 - 本会議 - 11号 平成17年03月15日 宇佐美登)

例(13)(14)は「アドバイス」「承認」がいずれも「アドバイスする」「承認する」とサ変動詞の形にでき、「アドバイスしてもらう」「(補助金を)承認してもらう」としてもほぼ同じ意味であるため、本動詞用法とは区別する。

C) ～テモラウ

動詞の連用形+テ+モラウとなっているもの。

(15) 野党は、午後の分科会が不正常にならないよう、職権で決めるにしても、正午の理事会ではなく、分科会が終わってからにしてもらえないかと、職権の段取りまでも丁寧にと党筆頭理事の中川正春理事に提案をしていたのであります。(177 - 衆 - 本会議 - 6号 平成23年02月28日 馳浩)

D) その他

動名詞が複合語の後要素になっているものなどは「その他」とし、上記の分類には当て嵌めなかった。

(16) これまでどおり企業献金をもらい、その上にさらに国から助成金を受けるといことは余りにも虫のいい話であります。

例(16)は「*企業献金する」というサ変動詞にはしにくく、しかし全く動詞性を欠いているともいえないので、この調査では本動詞にも～ヲイタダクにも入れなかった。

5. 2 イタダク

イタダクには本動詞の用法と補助動詞の用法としてテイタダクのほか～ヲイタダク、オ・ゴ～ヲイタダク、～イタダク、オ・ゴ～イタダクの形がある。モラウと同じく実際にはこれらの中間的な例もみられ、連続的である。モラウに比ベイタダクは多様な形があると言える。

A) 本動詞イタダク

本動詞用法のイタダク。ヲ格が動詞の用法のない名詞であったり、文脈上

モノであることが明らかなもの。また、イタダクにヲ格や動名詞、動詞連用形が前接していないもの。

(17) こうした中間的な整理を通じて国民各層の幅広い意見をいただき、そうした国民各層の御意見を踏まえて、来年夏を目途に、革新的エネルギー・環境戦略の策定を行ってまいります。(178 - 衆 - 本会議 - 3号 平成23年09月15日 野田佳彦)

直接つなげればオ・ゴ～ヲイタダクになるような動名詞がヲ格に来ていても、間に何か他の修飾成分などが入っていればここに入れた。動名詞とイタダクの結びつきが強くないと考えられるからである。また、本研究の主題は名詞・動名詞+ヲ+モラウ・イタダクという形なので、それらの形を～ヲイタダク、オ・ゴ～ヲイタダクとして分離して取り出すためでもある。

(18) 私も、多くの避難所で、もとの生活にいつ戻れるのかという御指摘を多くいただきました。(177 - 衆 - 本会議 - 21号 平成23年05月19日 菅直人)

(19) 斉藤鉄夫議員にお答えをいたします。御質問を二問いただきました。(174 - 衆 - 本会議 - 24号 平成22年04月20日 平将明)

B) ～ヲイタダク

動名詞に直接ヲイタダクと続いているもの。～ヲモラウと同じく、ヲ格を結果名詞と解釈して本動詞用法と捉えることもできるが、サ変動詞化できるものは本動詞用法と分けてここに入れた。

(20) また、海上保安庁が機動的、効果的に対応できるよう、海上警察権の強化について検討を急ぐべきだと考えますが、政府の取り組みにつ

いて、総理より答弁をいただきたいと思います。(177 - 衆 - 本会議 - 2号 平成23年01月26日 城島光力)

(21) 農業者戸別所得補償制度に関する質問をいただきました。(177 - 衆 - 本会議 - 3号 平成23年01月27日 菅直人)

例(20)(21)は「答弁」「質問」がいずれも「答弁する」「質問する」というサ変動詞にでき、「答弁していただく」「(農業者戸別所得補償制度に関して) 質問していただく」としてもほぼ同じ意味であるため、本動詞用法とは区別する。

C) オ・ゴ～ライタダク

オ・ゴの上接する動名詞や動詞連用形にライタダクが続くもの。これも～ヲモラウ、～ライタダクと同じく、本動詞と連続的である。例文(22)では、「御協力」が「年金事務に」と二格をとっているので動詞に近いふるまいをしていると考えられるが、(23)では「皆様方の」と連体修飾されており、名詞に近いふるまいをしているように見える。ここではどちらも「協力していただく」「許していただく」といった形ができることからオ・ゴ～ライタダクに含めている。例(22)(23)は「協力」「許し」がいずれも「協力する」「許す」という動詞にでき、「協力していただく」「(皆様方に) 許していただく」という形にできるため、本動詞用法とは区別する。

(22) 今後、ねんきん特別便の送付が本格化することも踏まえ、必要に応じ人員の強化を図るとともに、さらに国を挙げて取り組むべく、これまで年金事務に御協力をいただいてきた地方自治体や企業などとも連携して、御協力を得ながらこの問題の解決を図ってまいります。(169 - 衆 - 本会議 - 2号 平成20年01月21日 福田康夫)

(23)開会に先立ち、議員の皆様方のお許しをいただき、私、議院運営委員長から御紹介申し上げます。(170 - 衆 - 本会議 - 12号 平成20年11月21日 小坂憲次)

D)～イタダク

オやゴの付かない動名詞や動詞連用形に直接イタダクが下接しているもの。

(24)私自身、こうした検討作業の先頭に立ち、皆様から評価いただける平成十年度予算を編成いたします。(140 - 衆 - 本会議 - 1号 平成09年01月20日 橋本龍太郎)

E)オ・ゴ～イタダク

オ・ゴ+動名詞／動詞連用形+イタダクとなっているもの。

(25)小沢環境大臣が三月三十一日に示されました中長期ロードマップ試案におきましては、風力発電は二〇〇五年の導入量に比べて二〇二〇年にその十倍の量を目指しておりますけれども、SEA 導入後の平均的な手続期間だけで三年を要すると言われていた中で、この目標を本当に達成できるのか、小沢環境大臣の見解と道筋をお示しいただきたいと思っております。(174 - 衆 - 本会議 - 27号 平成22年05月11日 福井照)

F)テイタダク

動詞の連用形+テ+イタダクとなっているもの。サセテイタダクもここに含めた。

(26)次に、菅内閣は、前内閣が行き詰まった結果、看板をかけかえたにすぎないという御指摘であります。それは、これから実際に何が実行されるかをよく見ていただきたい、このように思っております。(174 -

衆 - 本会議 - 36号 平成22年06月14日 菅直人)

(27) 先日の五月二日、四兆円を超える規模の補正予算を全党会派一致で成立をさせていただきます。まずお礼を申し上げたいと思います。

(177 - 衆 - 本会議 - 21号 平成23年05月19日 菅直人)

G) その他

イタダクについても、動名詞が複合語になっているものなどは「その他」とし、上記の分類には当て嵌めなかった。

6. 国会会議録に見る各用法の出現数の変遷

1947(昭和22)年の第1回から2011(平成23)年の第179回までの全期間を5年間ごとに区切り、対象とした以上の各形式の期間ごとの総出現数の推移をみる。

回次を表す数字と西暦年はおおよそ表1のように対応する。「おおよそ」というのは臨時会において1つの会期が年をまたぐことが少なくなく、必ずしも回の区切りと年の区切りが一致しないからである。ここではその会期の終了日の年をその会議の開会年とした。これは通常国会が1990年までは12月に招集されていたことから、それまでの通常国会の会期のほとんどが年をまたいだ翌年になり、召集日をその会議の年とするとほとんどの期間が実際はその翌年に記録されたものになってしまうからである。例えば第120回通常国会は1990年12月10日から1991年8月4日までであり、召集は1990年だが活動のほとんどは1991年であり、本調査では終了日の1991年を会議のあった

表1 国会会議録の回次と年の対応

回次	年
1～12	1947～1951
13～25	1952～1956
26～39	1957～1961
40～54	1962～1966
55～67	1967～1971
68～79	1972～1976
80～95	1977～1981
96～107	1982～1986
108～122	1987～1991
123～139	1992～1996
140～153	1997～2001
154～165	2002～2006
166～179	2007～2011

表2 モラウの各形式の出現数

回	年	本モラウ	～ヲモラウ	テモラウ
1～12	1947～1951	184	9	685
13～25	1952～1956	93	3	389
26～39	1957～1961	35	3	195
40～54	1962～1966	34	1	313
55～67	1967～1971	40	2	283
68～79	1972～1976	38	0	264
80～95	1977～1981	21	0	169
96～107	1982～1986	20	4	109
108～122	1987～1991	19	1	92
123～139	1992～1996	18	3	131
140～153	1997～2001	39	3	175
154～165	2002～2006	31	1	149
166～179	2007～2011	59	3	157

表3 イタダクの各形式の出現数

回	年	本イタダク	～ヲイタダク	オ・ゴ～ヲイタダク	～イタダク	オ・ゴ～イタダク	テイタダク
1～12	1947～1951	38	15	102	1	52	1025
13～25	1952～1956	12	14	87	0	57	593
26～39	1957～1961	16	10	84	1	81	344
40～54	1962～1966	11	22	284	4	220	778
55～67	1967～1971	27	58	494	5	418	1225
68～79	1972～1976	24	39	321	6	240	779
80～95	1977～1981	25	61	462	2	288	969
96～107	1982～1986	49	71	556	6	301	902
108～122	1987～1991	41	82	571	15	368	1044
123～139	1992～1996	69	111	713	15	411	1289
140～153	1997～2001	237	126	972	37	592	1672
154～165	2002～2006	61	119	295	26	478	1543
166～179	2007～2011	110	231	1294	50	495	2119

年としている。

表2、表3はモラウとイタダクのそれぞれの形式の5年ごとの出現数である。全体としてモラウが減少しイタダクが増える傾向にある。～ヲモラウは一

貫して少数であるが、～ヲイタダクとオ・ゴ～ヲイタダクはかなり増加している。イタダクを形式別にみると、本動詞イタダク、～ヲイタダク、オ・ゴ～ヲイタダク、～イタダク、オ・ゴ～イタダク、テイタダクの総ての形式が増加していた。テイタダクが最も多いことは期間を通して変わらないが、増え方は他の形式に比べて鈍い。1947～1951年の期間はテイタダクが圧倒的だったが、2007～2011では他の形式の総計と同程度になっている。この間、オ・ゴ～ヲイタダクとオ・ゴ～イタダクが著しく増加しており、補助動詞用法とそれに準ずる用法が多様になっていく傾向がある。オ・ゴ～ヲイタダクは菊池(1997)で「いささか耳障りである」とされ、野口(2009)も「過剰敬語」とするなど、非規範的とされるが、今回の調査結果では、少なくとも国会会議録という位相においては20世紀中ごろからオ・ゴ～イタダクよりも多く使用されていたことが分かった。

7. ～ヲモラウと～ヲイタダクのヲ格名詞の違い

ここまで、国会会議録に見られるモラウとイタダクの各用法についてその増減を調査し、モラウに比べてイタダクのほうがバリエーションが豊富であり、数も増加していることを示した。さらに詳しく、～ヲモラウと～ヲイタダクのヲ格名詞に着目すると、～ヲモラウには見られない用法が～ヲイタダクにみられる。

～ヲモラウのヲ格名詞によく見られるのは、「献金」「答申」「配給」など、サ変動詞語幹ではあるがその行為によって与えられる金銭や物資、情報などのものを表すと捉えられるようなものである。それに対し～ヲイタダクでは金銭や物資のようなものを表す名詞はあまり見られない（「答申」「答弁」「質問」など情報と取れるものはかなり多い）。また、次のような例は、行為の結果できたものの授受というよりは、行為そのものを恩恵としてとらえるテイタダクにかなり近いものではないかと思われる。

(28) ありがたいことに、民主党の皆さんからは真摯な取り組みをいただいて、最終段階で、飛び入学の余りにも激変があつてはならないという指摘に我々は耳を傾け、一方で、社会奉仕活動という言葉にも若干異論がございましたので、ボランティア活動という言葉¹を修正文に入れて、私たちは、民主党とともに、この法案の賛成を決めたのでございます。(151 - 衆 - 本会議 - 39号平成13年06月14日 鈴木恒夫)

(29) 公租公課のあり方を含めた空港整備勘定の見直し、首都圏空港の容量拡大やオープンスカイ政策の推進等、今後の航空行政のあり方については、国土交通省成長戦略会議で議論を重ねて、五月の十七日に取りまとめをいただいたところでありまして、その議論を踏まえまして、航空会社の負担軽減を図る観点から、関係省庁と調整し、御趣旨のような検討を進めていきたい、このように考えております。(174 - 衆 - 本会議 - 32号平成22年05月27日)

(28)(29)は「取り組み」「取りまとめ」そのものの授受ではなく、「取り組んでいただく」「取りまとめていただく」を異なるバリエーションで表したと思われる。このように和語動詞連用形をヲ格に取り、補助動詞的な性質の強い用法は～ヲモラウには見られなかった。

8. まとめ

本研究では敬意の差に留まらないモラウとイタダクの用法の違いを明らかにするため、国会会議録を資料にモラウとイタダクの本動詞用法から補助動詞用法に至る様々な用法を分類し、本動詞モラウ、～ヲモラウ、テモラウ、本動詞イタダク、～ヲイタダク、オ・ゴ～ヲイタダク、～イタダク、オ・ゴ～イタダク、テイタダクについて増減と、～ヲモラウと～ヲイタダクについてモラウとイタダクの直前に共起する名詞、動名詞、動詞連用形を観察した。

そこから観察できたことは次の通り。

- (ア) 全体としてモラウが減少しているのに対しイタダクが増加している。
- (イ) イタダクの補助動詞的な用法がテイタダク中心からオ・ゴ～ライタダク、～イタダク、オ・ゴ～イタダクの増加によって多様性を増している。
- (ウ) 全体を通してオ・ゴ～イタダクよりオ・ゴ～ライタダクの方が多い。
- (エ) ～ライタダクがヲ格に和語動詞連用形を取るのに対して、～ヲモラウは取らない。

国立国語研究所・宮島(1978)は、本動詞用法のイタダクについてモラウよりもやや例外的な、所有権の移動を伴わない例が見られると指摘していた。

本研究ではさらにイタダクの補助動詞用法のバリエーションもモラウに比べて多いこと、～ライタダクは～ヲモラウには見られない和語動詞連用形をヲ格に取り補助動詞的な性質が強いと思われる用法を持つことを示した。

イタダクはモラウの謙讓語であるが、補助動詞やそれに近い用法の場合、モラウよりさらに広い使われ方がされていると言えそうだ。

[参考文献]

- 青山學司「会議録作成に携わって一字句の整理を中心として」『立法と調査』152
1989. pp.42-47.
- 影山太郎『文法と語形成』（ひつじ書房）1993.
- 菊池康人『敬語』（講談社）1997.
- 国立国語研究所・宮島達夫『動詞の意味用法の記述的研究』（秀英出版）1978.
- 高見健一・加藤鉦三「受益表現の新展開」『言語』32-1～32-6 2003.
- 野口恵子『バカ丁寧化する日本語 敬語コミュニケーションの行方』（光文社）2009.
- 松田謙次郎編『国会会議録を使った日本語研究』（ひつじ書房）2008.
- 山田敏弘『日本語のベネファクティブー「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法一』（明治書院）2004.

由井紀久子「モラウの意味的抽象化・希薄化の過程」『阪大日本語研究』5 1993.
pp.83-93.

(大学院博士前期課程修了)

SUMMARY

Differences in Usage between *Morau* and *Itadaku*
—Through the Use of the Japanese Diet Record—

Tomoya IWAI

The Japanese benefactive verb *itadaku* has two usages as a main verb and as an auxiliary verb.

There are few previous studies which mention forms except *te-itadaku* or *o/go-itadaku* or differences between *morau* and *itadaku* in elements other than polite forms.

This paper suggests that there are differences between *morau* and *itadaku* which are due to not only politeness.

We classified *morau* and *itadaku* basing on their forms, and investigated each form of *morau* and *itadaku*.

Results show that *itadaku* is increasing and tends to be used as an auxiliary verb or in similar cases. In addition, there are conjunctive forms of Japanese verbs appearing before *wo-morau* and *wo-itadaku* as co-occurring nouns. Meaning of these expressions is almost the same as that of an auxiliary verb. *Itadaku* has expanded its abstract usage throughout the latter part of the 20th century. In contrast, *morau* does not show this tendency.